

大乘莊嚴經論（弘法品）の考察

舟 橋 尚 哉

私はすでに第九章菩提品^①、第十章信解品、第十一章求法品^②については考察したことがあるので、今回は第十二章の弘法品について考察してみようと思う。

弘法品は初めに dharmadēśanāyāṃ（法を説くにおける）とあるように、説法品ともいわれる。

さて弘法品（説法品）の第四偈は、Lévi 本では次の如くなっている。

āgamanato vibhūtvato deśanāgrasatvānām |
mukhato rūpāsarvākāśāduccaranatā 'pi...||4||

「最上の衆生に対する教説は、阿含からと、証得からと、威力からと、口からと、一切の色からと、虚空からも発声される」

この偈は Arya 調であるため、a—b が 30 マートラであるから、c—b は 27 マートラになるはずである。従ってこのままの偈では、30 マートラと 24（または 25）マートラとなつて不完全である。宇井博士はこの偈は一シラブル欠けているが、「或は単に tathā などか」といっておられる。たしかに

tathā を最後に入れば、三マートラ増えて 27 マートラになり、Arya 調の規定と合致する。そして第六韻脚は単綴であるという規則とも合致している。すなわち、

mukhato rūpāsarvākāśāduccaranatā 'pi tathā ||4||
UU—UU—UU—UU—UU—UU—UU—UU—UU—UU—

となる。しかしこれでよいのであろうか。

Lévi の仏訳（p. 139 脚註 4）並びに長尾博士の訂正によれば sarvākāśād を sarvata ākāśād に訂正されている。これなら c—p の部分は

mukhato rūpāsarvata ākāśāduccaranatā 'pi
UU—UU—UU—UU—UU—UU—UU—UU—UU—UU—

となり、27 マートラで、第六韻脚は単綴であるという Arya 調の規定とも合致する。そして Bagchi 本（p. 76, l. 25）もそれに従っている。

しかし私は大谷探検本の B 本（76b, l. 3）を参照すると、sarvād ākāśāduccaranatā

であろう。

更に安慧釈の偈文には、*rgyal sras* とあって、*jñātmaja* (sg. v) のようにも見えるが、その偈文の直後の説明に、

「その中、勝者とは仏世尊である。その子とは法界より生じた菩薩である。諸菩薩たちの語とは八支と相応するという意である」

とあって、「諸菩薩たちの語」とあることよりすれば、*jñātmaja* (sg. v) とあるよりは、*jñātmaje* (sg. l) の方がよいと思われるので、*Levi* や武内教授の訂正でよいことになる。その他の個所も武内教授の訂正でよいと思う。

長尾博士 (Index xvi, l. 2i) もこれを採用しておられるし、宇井博士 (p. 617) も *Bagchi* (p. 77, l. 17) も同じくこれを採用されている。従って私は大谷探検本の A 本、B 本の不明瞭な点を *NA* 本や *NS* 本を用いることによって *jñātmaje* (sg. l) でよいという資料の一つ加えたにすぎない。

次に第五偈の長行には、梵天所問経が引用されている。

「梵天所問経中に説かれた如く。(1) 正法の受持と、(2) 自己の智慧を明浄にすることと、(3) 善人の業を為すことと、(4) 雑染と清浄とを顕わすこととの、四法を具足せる菩薩達は大法施を与える」

この梵天所問経は羅什訳の思益梵天所問経卷一の、

「何等四。一者守護於法。二者自益智慧亦益他人。三者行善人法。四者示人垢淨」(大正一五、三六 a)

や、竺法護訳の持心梵天所問経の、

「何等四。將護正法。化己及彼使入智慧。修正士業。示現塵勞瞋恨之結」(大正一五、三 c)

の中に一致する経文が見出されるから、これらよりの引用であると考えられる。梵天所問経は、莊嚴經論求法品第七十六偈の長行にも引用され、また撰大乘論にも引用されている。

次に第九偈以下に説かれている六十種の音声については、すでに袴谷憲昭氏が *Vimuktisena* の *Abhisamayalamkāravṛtti* との関係で詳しく論じられているので、ここでは省略する。最後に第十六偈、第十七偈の長行に引用されるところの、

asāre sārānatayo viparyāse ca sushīṭhā

kleśena ca susaṃkīṣṭā labhante bodhimūtanāṃ

「不堅堅固解。善住於顛倒。

為煩惱所惱。速得大菩提」(大正三一、六二〇 c)

の偈頌は、宇井博士の指摘の如く『撰大乘論』の所知相分の偈頌と一致する。そして莊嚴經論の漢訳には「如大乘経偈説」(大正三一、六二〇 c) と説かれている。

実はこの偈頌は *Dharmapada* (法句経) の第十一偈と類似しているように思われる。法句経の第十一偈には、

11. *Asāre sārānatayo sāre cāsāradassino*
te sārāṇ nādhigacchanī micchāsankappagocārā.

「不実を実と謂い、又実を不実と見る人は、実を了解せずして、邪思惟に住す」(荻原訳)

と説かれている。

その他、第九偈の長行の Lévi 本⁶ p. 80, l. 7 sampan- は、袴谷氏の訂正のように、samyag- であろうと思う。大谷探検本の A 本 (73b, l. 2) も B 本 (78a, l. 8) も samyag- となっている。Na 本 (48a, l. 8) も Ns 本 (66a, l. 4) も samyag- となっている。Corrado Pensa: Abhisamayālaṅkāravṛtti p. 113, l. 18 は samyag- であるから、やはり sampan- は samyag- に訂正すべきであろう。

第十六偈、第十七偈の長行の、Lévi 本 p. 82, l. 25 sa samkṣiṣṭā は Lévi の仏訳、長尾博士の Index⁶⁾ それに Bagchi 本にも訂正はないが、宇井博士の訂正のように、susamkṣiṣṭā に訂正すべきであろう。直前の引用偈は susamkṣiṣṭā (Lévi, 本⁶ p. 82, l. 21) となっている。大谷探検本の A 本 (76a, l. 7) も B 本 (81b, l. 1) も susamkṣiṣṭā となっている。またチベット訳も rab hon mois pa (影印北京版 82—2—8) となっている。直前の susamkṣiṣṭā のチベット訳 rab hon mois pa (影印北京版 82—2—6) と一致しているから、この点より見ても、susamkṣiṣṭā と訂正すべきであると思う。

以上、第十二章の弘法品について、若干の考察を加えたにすぎないが、この中にも種々の問題があることがわかった。今後は他の章についても同じように考察を試みたいと思う。

- 1 拙稿「大乘莊嚴經論の研究—菩提品第一偈—第三十七偈を中心として」(大谷大学研究年報第三十二集)
- 2 拙稿「大乘莊嚴經論の研究—菩提品第三十八偈—第五十五偈を中心として」(仏教学セミナー第三十三号)
- 3 拙稿「大乘莊嚴經論(菩提品)の原典考」(印仏研究第二十九巻第二号)
- 4 拙稿「大乘莊嚴經論(信解品)の原典考」(印仏研究第三十巻第一号)
- 5 拙稿「大乘莊嚴經論の原典考—求法品を中心として」(仏教学セミナー第二十七号)
- 6 拙稿「大乘莊嚴經論(求法品)の原典の考察—大谷探検本 A、B を用いて」(印仏研究第二十七巻第一号)
- 7 Lévi p. 77, l. 24 参照。
- 8 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」六一—六頁註参照。
- 9 National Archives, Nepal の目錄 Bṛāhatsūpatraṃ p. 112 No. 291 Mahāyānasūtrālaṅkārah を Ns 本と呼ぶことにする。この写本を入手するのに高岡秀暢氏には大変世話になった。ここに感謝の意を表します。
- 10 武内紹晃教授「大谷探検隊招来の『大乘莊嚴經論』について」(電谷大学論集第三五二号) 昭 31 年、八一—八三頁参照。
- 11 Lévi 本⁶ p. 78, l. 19 参照。
- 12 Lévi 仏訳 p. 141 脚註参照。
- 13 影印北京版 301—4—8 参照。
- 14 Lévi 本⁶ p. 78, l. 5 参照。
- 15 Lévi 本⁶ p. 75, l. 20 参照。
- 16 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」四六二頁—四六三頁参照。武内紹晃教授「瑜伽行唯識学の研究」七四頁参照。
- 17 袴谷憲昭氏「大乘莊嚴經論」散文箇所著者問題について」(駒沢大学仏教学部論集、第四号昭 48 年) 一頁参照。
- 18 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」六一—七頁参照。
- 19 Dhammapada p. 2, l. 19 Shukla 本⁶ 171 p. 19, l. 1 参照。
- 20 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」六一—七頁参照。